
THE LAST MEMORY ~ 第0使徒風斬レン ~

風斬 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE LAST MEMORY 第0使徒風斬レン

【Nコード】

N1570Z

【作者名】

風斬 澪

【あらすじ】

エクソシスト風斬レンは、ノアメモリーが覚醒したため
教団を去る

彼女の運命は如何に！？

第0夜　別れ

―あの惨劇から約5年―

ドガアンッ!!

何か壊れる音とともにゴーレムから室長、コムイ・リーから通達が入る

通達！通達！ホームの壁が何者かに破壊された模様！

ただちに確認へ向かえ！

「メンドクせ」

そうつぶやいたのは、イノセンス「六幻」をもつエクソシスト神田ユウだ

面倒だ、と言いながらも指令なのでとりあえず音がした部屋へ

向かう

向かった部屋に住んでいるのは、エクソシスト風斬レンだ

神田が着いたときには、時既に遅し、住人風斬レンの姿も、彼女のイノセンス‘炎乱’も無くなっていた

神田はゴーレムの向こうにいるコムイへ言った

「おい、コムイ」

神田くん？

「壁を壊したヤツがわかった」

それは誰だい？

「多分、レンだろうイノセンスも無くなってる　俺はアイツを追う」

無茶だよ、神田くん　それにどうして彼女が逃げたってわかるのさ

「机の上にメモがあった　げんきでね　ってな、おまけにさよなら　そう書いてある」

…そういうことが、<室長！レンがどこにいるかわかりました！>どこだい！？<崖を降りたトコの森です！>

神田くん！レンちゃんを追って！

「了解、門を開けるコムイ」

急いで！神田くん

「壁、壊してきちゃったけど門から出た方が良かったかな」

ハア、と溜息をつく藍色の髪の少女、彼女の足にはさっきまで傷があつたのだろうか血痕がある

「急がないと、教団の追手がくる」

「オイ」

ふいに背後から聞き覚えのある声に呼び止められた少女は、振り向いて絶句する

「…………げっ！ユウ！？」

彼女を呼び止めたのは神田ユウだ

「レン、お前こんなトコでなにしてる？」

彼女、——レンは、動揺していたがとりあえず一言

「…ユウに話す必要があるの？」

レンがそういうと神田は自身のイノセンス‘六幻’の切っ先をレンの首にあてた、そして

「なにがあつた？」

と、問うだが、レンは目を伏せ話そうとはしなかった　しばらくたつてレンが口を開く

「……………いえない…言えないよ…」

まるで今にも消えてしまいそうなほどか細く、小さな声で言った
よく見ると彼女の頬には涙がつたっている

神田は何かを察したのだろうか、六幻を鞘へおさめた　そして、
神田はレンを抱き寄せた

「!?!? ユウ？」

「…お前が何をしようと俺の知ったことじゃねえ…だから、話さなくていい」

そう言って神田はレンのことを少し強く抱きしめた

「ユウ…ありがとう」

レンはそういうと、普段見せている笑顔で神田に笑いかけた、まるでもう大丈夫だよ、そう言わんばかりの笑顔で

「ああ」

神田は短くそう返すとレンを離す

「それで？レンお前これからどうするつもりだ？」

「えっと…どうしよう、一日早く出てきたから、何にも考えてない…」

「ハア？一日早くでてきた？どうしてだ」

「私は、もう教団に戻ることはないだろうからじゃないかな」

『教団に戻ることはない』そう言ったレンの表情には、寂しさと悲しみが混ざっていた

「なあ、レン」

「何？」

「お前明日まで、一人でココにいるつもりか」

「まあ、明日まで向かえは来ない…かな」

「明日まで、明日までお前のそばにいてやる」

「ハイ？今なんと？」

なぜか、そう言い返すレンの目は点になっている

なぜなら、普段の神田が『そばにいてやる』なんて言葉いうハズがないからだ

「いやいやいやユウ！アンタ本部に戻れ！」

「なんでだ？」

「なんでもなにも アンタエクソシストでしょーが！」

心なしか先程のレンと比べると語気が荒くなった気がしないでもない こんなやり取りがしばらく続き

「とりあえず、落ち着けレン」

神田のその一言でレンはとりあえず落ち着く、そして、核心に迫る

「なんで？わたしは、裏切り者だよ？」

「裏切り者だが、知ったことかよ お前はお前だろ？」

「！…そうだね」

少しの間レンは黙る そして、空を見上げると『もう、夜か』そ
うつぶやくと野原に寝転がる

すると、レンは突然感嘆の声をもらす

「きれい…」

「レン？どうした」

神田は、レンが寝転んでいるのをみると 同じ様に寝転がった

「すげえな」

レンと神田が見たのは、夜空一面に広がる星 一つ一つ色こそ違
うが夜空に良くはえてとても美しい

「ユウ？」

「なんだよ」

「ありがとう 大好きだよ、ユウ」

「ああ」

「おやすみ…」

「それじゃ、ユウ元気でね　リナちゃんにもよろしく言っ
いて」

「待て」

歩き出したレンをいきなり呼び止め　何かを投げた

「それ、持っつけ」

あと、――「……」

神田はレンに耳打ちすると

「わかったな？」

「――うん、わかった」

で、これって“約束”？」

「ああ」

この日を境にレンを見たものはいない

とある一族を除いては――…

第0夜〜別れ〜（後書き）

駄文ですがどうぞよろしく

風斬 レンに質問！

質問ルームにて

「それでは早速質問を始めたいと思いますーす」

「何する気よ？駄文作者」

「質問だよ、質問！では第一問！」

「いきなりだな…」

「身長・体重は？」

「164？・41？」

「好きなものは？」

「サラダとか野菜類だよ」

「嫌いなものは？」

「肉系 でも人なら、コムイ、千年公」

「イノセンスは？」

「炎乱という槍型のものだ」

「イノセンスの能力は？」

「秘密だよ、でもほっときゃ出てくるんじゃない」

「メモリーの名前は？」

「知らないね」

「誕生日は？」

「7月10日」

「血液型は？」

「O型」

「年は？」

「現在16」

「では、最後に風斬レンさん！皆さんに挨拶お願いします！」

「えーっと、これからしばらくの間、よろしく」

「では」

「「じゃあな」」

風斬 レンに質問！（後書き）

そろそろレンのキャラを固めていききたいと思います

第1夜〜目覚め〜

side レン

目を開けた時、見たのは真っ白い天井、名前以外何も分からない
生きる理由も、なんでここにいるのかも、何もかも

「ようやく、目覚めたな風斬レン」

「！誰だよ、アンタ…」

私が問うたのは、褐色の肌に額に良く分からない模様をつけた男

「まあ、そういうのはトーゼンだよな オレの名前は

ティキ・

ミックだ」

「あゝレン起きてる〜ティッキーなんでボクに教えてくれないの
さ〜！」

「教えたぞ、ロードお前が聞いて無かっただけじゃないのか？」

「ティッキーのイケズウ〜」

「おやおや、ようやく目覚めたようデスネ？風斬レン？」

なんだ？こいつは？服は貴族とピエロを混ぜたような格好、達磨

のような体型

感想すら浮かばない

「「ジャスデビ登場！」」

「今度は、何なんだよ　どいつもこいつも…」

あれ？空気が止まった？私なんか言っただけかな…今突然入ってきた二人組もフリーズしてる

「ヒヒツ、こいつ結構口悪いね」

二人組の金髪の方がそう言った

なるほど、さっき空気を止めたのは私が…うん？なんか異和感があるな

よく見てみると、さっきのティキとかいう奴とかロードって子に残念な二人組…

あと私、全員もしかして、いや、もしかなくても肌の色一緒？

私の肌ってこんなに浅黒かったけなあ…

「ま、仲良くしようよぉ～レン～ボクはロードだよぉ～」

「なんで、私の名前知ってんの？」

「秘密っ」

「デロは、ジャステロ」

「オレはデビットだ」

「二人合わせてジャステビだよ ヒヒッ」

「ああさっきの二人組か」

「二人組じゃねえ！ジャステビだ！」

確か、デビットだっけ？ジャステロとかいう奴より五月蠅いな
…黙らせてやろうか

ま、いつか メンドくさいし

ゴトッ

私は、落ちたものをデビットに渡そうとした、その時そよ風が吹
き それに書いてある

文字、それは

“請求書”

「オイ、何か落ちたぞってコレ…請求書？えっと、ナニナニ蛙の
ひずめ亭 13ギニー、

鳥のはらわた亭 45ギニー、e t s 占めて 86ギニー……
うわー何これ」

「ジャスデビたま、また借金つけられたレロ〜?」

かぼちゃがついた傘が、なぜかしゃべる　するとジャスデロが口を開く

「穴あき傘にされたくないなら黙ってる　ヒヒッ」

なんなんだろ、こいつらの勢力図…

「茶番が続きまシタガ、本題に入りまシヨウ? 風斬レン?

お前は、我輩の仲間になるつもりはアリマスか??」

「…好きにしろ、どうせ私に選択権は無い様だからね　でも、」

「でも? なんでシヨウ??」

「記憶が戻ったら、私はアンタらをどうするか　分からないよ?」

そっいつて　微笑む彼女はまるで悪魔のようだった

「“戻ったら”ご自由ニ?　…戻るハズナイデスケドネ?」

千年公が最後に言った言葉は、レンには聞こえていないようだった

「どうせあなたはノアになったのデスカラ? 我輩の仲間になるホカナイノデスヨ?…風斬レン?」

「ノアとやらが何かはともかく、協力してあげるよ…千年公」

今の‘ノア’としての彼女には、
‘エクソシスト’だった頃の面
影すら残ってはいなかった…

第1夜〜目覚め〜（後書き）

レンがノアになりなしたねー

いや〜無計画にもほどがある

第2夜〜亡霊〜

風斬レン 18歳

「マテール？」

「ハイ？先程‘ブローカー’から情報がありマシテネ？」

「何の情報？千年公、もしかしてイノセンス？」

そう問いたのは、藍色の髪のア、レンだ

レンの質問に答えるのは、少し、いやかなり太っている千年伯爵だ

「その通りデスヨ？レン？ 取りに行つてモラエマスカ？？」

「トーゼン！…で、マテールってどうやって行くの？」

「ゲートを出しマスカラ、少し待つててください？ おゝいティキぽん？」

「おい、千年公その呼び方やめてくれよ で、ご用は？」

そう言つて闇から顔を出したのは、ティキだ

そして千年公はティキに何か耳打ちした するとティキがレンを呼ぶ

「レン、ちょっと来いよ」

「あいさー」

ティキに連れられレンが来たのは、膨大な武器が保管されている部屋だ

部屋を見回すと、銃に剣、弓など様々な武器がある

「確か、コレだっけな」

ティキは、全長140?は軽くあるだろう桐箱をもってきた
すぐさまレンは、ティキに問う

「ティキ、何これ？」

「開ければわかる」

そして、レンは桐箱を開け、その青い瞳には困惑の色が宿る

「おい、ティキ、なんでイノセンスがココにある？」

レンが開いた桐箱の中身は、レンが、エクソシストだった頃の武器だった

だが、今の彼女はそれを知らない、いや知るはずがない

重くなった空気を何とかしようとティキはとりあえず口を開いた

「これは、お前がノアになる前に使っていた武器だ 名前は知らんが」

ノアになる前なんて、ないだろ、そう言わんばかりの疑いの目

「いいから持っとけて」

そう、強引にレンにイノセンスを渡すと

「さ、あんま千年公を待たしてやんなよ」

「…了解」

「千年公、終わったぞ」

「遅いデスヨ？もうゲートは開いてマス？レン、準備はいいデスカ？？」

さっきの暗い顔は、ドコへやら楽しそうな表情のレンがいた

「あいさ、準備完了だぜ、千年公」

「では、行ってきたクダサイ？マテールへ？」

「行ってきたまーす」

ゲートの光の中に彼女の姿は見えなくなった

同時刻

マテールへはアレン・ウォーカー、神田ユウの2名のエクソシストが
向かっていた

第2夜〜亡霊〜（後書き）

そろそろ原作介入します！

土日は、UPできませんので、
あしからず

第3夜　マテール2

「INマテール！」

まるで、長い時間探していたかのような大声をあげるレン

だが、彼女がココに着くまでの所有時間は約2分だ

「…さて、イノセンスはどこかな…？」

そういう彼女の笑みは狂気に満ちていた

同時刻南イタリア　マテールの地

「よし　結界に捕えたぞ…！」

「死んでも出すな…！！」

約3体のアクマが結界装置で捕えられていた

「これで、しばらくは時間が稼げますね隊長」

「…どうかなこの数の結界装置で足りるかどうか」

息も絶え絶え隊長と呼ばれた者が、重い口を開く

「中央の奴の姿を見る…あれはだいたい人間を殺してやがる」

ドン！

「！！！」

隊長の隣のファインダーがアクマに頭を撃ち抜かれたのだ

（ヒヤヒヤ！ヒヤヒヤヒヤヒヤ！！）

（私はアクマ！！！！）

ボコボコボコと結界が膨張していく

それを見た隊長は、大声を張り上げる

「ヤバイ…退避しろ！こいつ 進化するぞ！！！」

するとその場に緊張感が走る

（私はアクマ）

（ダークマターから生まれた新たな自我！！）

（育んでくれて どうもありがとう…）

そして、結界が破られピエロのようなアクマが顔を晒した

「レベルアップだー」

都市にファインダー部隊の絶望の声が響いた

「ねえ、千年公イノセンスってどんな形してんの？」

そうデスネエ？デハこんな話をしまシヨウ？

千年公がした話はこんなものだった

‘古代都市マテール’には、亡霊が出るという

亡霊の正体は、かつてのマテールの住人

町を捨て移住していった仲間達を怨み

その顔は恐ろしく醜やか

孤独を癒すため 町に近づいた子供を引きずり込む

「つまり、何型だよ千年公」

まるで、わかりずれエ、そう言わんばかりの表情だ

おそラク、人型でシヨウ？

ちっ、とレンは舌打ちすると無線を切った

『ファインダーあたりに聞くとするか…』

そして、先程絶叫が聞こえたところへ向かう

「…！」

鼻につく異臭、あたりにあるのは、赤

おそらく全てファインダーのものだろう

体が残っている者がいないわけではない、

残っている者もほとんどが原型を留めていなかったのだ

すると、他の場所からミサイルの轟音が響いてくる

「おっ？イノセンス見つかったのかな？」

ニヤッと笑うと音がしている場所にレンは突っ込んでいった

「どんどん撃ってー」

先程、レベル2となったアクマが指揮をとっているようだ

2のしたから うつつと人間のうめき声がする

「この 人間め」

ぐに、2はファインダーの頭を踏んでいた

「装置ごと人形を結界に閉じ込めるなんて考えたね

こりゃ時間かかりそうだ」

すると死にかけのファインダーは2に向かって息も絶え絶え言った

「イゝイゝ ノゼンズはお前らアクマになんか渡さない…っ」

2はファインダーの頭をぐつと踏む

「ギヤアア」

ブシュ、ファインダーの頭から血が吹き出る

「ヒマ潰しにお前の頭で遊んでやる」

「やめろ！」

白髪のエクソシストが無謀にも2に突っ込んでいった

結界のなかの人形も驚いているようだ

そのとき不意に声がした

「イノセンス発見！…エクソシスト？」

ラッキー、と呟くと

「おい、2 そいつ私に譲ってくれない？ 楽しそうだからさ」

「っ…ノア様、わかりました…」

「お前はイノセンス追えよ？ 追わなかったらお前

消すよ？」

冷たい冷酷な声でレベル2に言い放つと

白髪のエクソシストに向きなおした

そして、レンは楽しそうに笑うと白髪のエクソシストに告げた

「つぎの相手は私だよ」白髪のエクソシストくん」

第3夜〜マテール2〜（後書き）

次回はVSアレン君です

相変わらずの駄文お許しください

第4夜　マテール3

「次の相手は私だよ」白髪のエクソシストくん

につこりと笑顔のレン、だが、アレンの顔つきは厳しい

（なんで、彼女を見てアクマは脅えた？）

アレンの疑問は当然のものだ、

レンがアクマよりレベルの高い存在ということ

ましてや、ノアと言う存在がいる、その事実すら知らないのだから…

そして、レンは笑顔のままアレンに聞いた

「私の名は、風斬レンだよ　あんたの名は？」

疑問を持ちながらもアレンは問いに答える

「僕の名前はアレン・ウォーカーです」

「そっかー覚えとくよ、アレン・ウォーカーでも私と戦って死ななかつたら、ね」

レンは“エクソシスト”だった頃のイノセンス

‘炎乱’を取り出す　そして――

「イノセンス発動——炎乱」

レンがイノセンスを発動させたことにより、

アレン・ウォーカーの疑問はまた増える

（この人、適合者！？あんなイノセンス教団で見たことがない！）

「なあ、アレン・ウォーカーよそ見してると

死んじゃうよ？」

気付いたら目の前まで来ているレン

「バイバイ——炎乱一陣目炎斬」

「！はやっ——」

ドガァン！

「なーんだ、弱いんだね、エクソシストって」

ハァ、と退屈そうな溜息を一つ

「僕は、まだ死んでませんよ？レンさん」

肩で息をしているが、傷一つアレンにはない

（危なかった…僕のイノセンスが発動していなかったら

僕はきつと死んでいた…！）

確かにレンのスピードは恐るべき速さだ

あの速さは常人にはない 当然アクマにも

「あんた、アレンだっけ？ 確か、アクマの魂が見える奴…

私ら、あんたの情報少し持ってるんだ

ま、千年公に聞いた程度のもんだけど」

「そういう貴女はどうなんですか？ レンさんあの速さといい、

そのイノセンスといい

貴女のほうこそ何かあるんじゃないんですか」

追及的なアレンにレンは一言だけ言った

「私は、千年公の仲間っていうか味方、ってところかな？

これ以上は教えられないよ…ありゃ？地震？」

先程からグラグラしていたのだが、

両者共に気付かなかった様だ

「こりゃ、やばいかも…」

「うそでしょ…」

ビキビキビキ……ゴシヤッ！

「ぎゃー……」

二人の声は地下へと消えていった…

第4夜〜マテール3〜（後書き）

しまった…

神田の存在を忘れていた…

どーしよ

第5夜　マテール4

「ぎゃー！ー！ー！」

ドシャッ！

静けさをたたえていたマテールの地下道

だが、レンとアレンが落下したことにより、

静けさは一瞬にして、消えうせる

すると、突然ガラガラとガレキが浮き上がった

「痛っっ」

先に起き上ったのはレンのようだ

片手にガレキを持っているのでかなり不自然だ

そして、もうひとつ不自然な所がある　それは

落ちてきたときの傷がひとつ残らず回復していること

だが、レンにとっては何もかもがどうでも良いのだ

——記憶を取り戻せば、それで…

ふいに、レンの隣の巨石がこれまた巨大な手が持ち上げる

「…っ…ここは？」

どうやら、アレンは生きていたようだ

体中が痛むのだろう、立ち上がるのもままならないようだ

「立てるか？アレン？」

挑発的にレンが言うと、自力で立ち上がる

「馬鹿にしないでください、レンさん」

「ああ〜ワリイ、ちょっとした癖でさ」

ハハッとレンが楽しそうに笑う、

つられてアレンも笑いそうになるだが、

アレンは、レンが自らの、そして教団の敵であることを

思い出し、そして険しい顔つきになる

レンが表情の変化に気づかないハズがない

一度間合いを取ると

「かかってこいよ、アレン・ウォーカー！」

（長引かせては面倒だね…、ちゃっちゃと済ますか…）

と、レンは炎乱を構えた

「では、行きますよっ！」

アレンはレンに無謀にも突っ込んでいった

ガギン！

ギン！

ズガン！！！！

激しい戦いの中、レンは余裕の笑みを浮かべている

だが、対するアレンの表情は苦しそうだ

そんな中、アレンはギリギリで攻撃をかわしながら

レンに聞いた

「レンさん！」

「？」

「あなたはッッ！」

ギーン！

レンは、アレンの首筋に、槍の先端を突き付けた

「何さ？私に聞きたいことでも？」

「ええ、僕には不自然に映るんですよ…」

なんで、アクマと人間が一緒に行動するんですか？」

「なにかと思えばそんなことかよ、答えは単純だ

アクマは私たちの兵器だから、それが答えよ」

「兵器だって！？何言ってる…」

レンは突き付けた炎乱を強く押し、アレンに告げた

「兵器は人が人を殺すものだ お前のイノセンスも兵器でしょ？」

そう告げたレンの声は、驚くほどに冷徹で殺意がこもっていた

レンが続ける、

「それに、—— 私には千年公が何しようが関係ない

私の目的に関係があること以外にはね」

「あなたの目的とはなんです？」

冷静にアレンはレンに聞き返していた

「2つの“約束”を守ること、そして

——記憶を取り戻すこと……

それだけが目的だよ」

「記憶を取り戻す？ どういう——…」

「悪いが少し眠っててもらうよ、アレン・ウォーカー……」

にこつと笑うとレンの笑顔は豹変する ノアの残忍な笑みだ

(いいかげんイノセンスを探さないと、千年公に叱られる)

同時刻 マテールの地下通路

レベル2はアレン・ウォーカーのゴーレム

ティムキャンピーを追っていた

トクトクトクトクト…

どうやら、レンにイノセンスを追え、と

言われてからずっと追いかけているようだ

ギョッ

2がタイムのしっぽを右手でつかむとぶらりとぶら下げる

「へへへへ！お前も殺す！！えいや！」

ぐしゃっ、2はタイムをチョップで破壊すると

「ヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

愉しそうに笑うのだった

その声がマテールの地下通路まで聞こえているとも知らずに

突然2の脳内に自分より格上のノア、レンの声が響く

（おい、お前イノセンスを追わなかったら、‘消す’と

言っただよね？

さっさと追えよ…役立たずが…）

レンの言葉が終っても2はしばらく硬直していた

だが、レンの‘消す’その言葉に威圧されたわけではない

2はレンの存在自体に恐怖しているのだ

レンが、ノアが言ったことは実行しないと消される

2の頭の中はそのことでいっぱいだった

だれでも、上の者は恐ろしいだろう？それと同じだ

（ノア様の命令は絶対！果たさなかったら私が消される！

せつかくここまで進化したのに消されるのはごめんだ）

と、思うとイノセンスを追うのに絶好の相手を見つける

（こいつなら、姿を写してもバレない…ヒヤヒヤヒヤ！）

第5夜〜マテール4〜（後書き）

全然進みませんねー

只今原作で2刊目です

第6夜〜マテール5〜

（こいつなら姿を写してもバレないヒヤヒヤヒヤ！）

レベル2が目を着けたのは、――

数分後、マテール地下通路

「神田殿」

スツと闇から出てきたのはファインダーのトマ

神田はトマがきたことに気づく

そして少女と老人に向き直ると

「悪いがこちらから引き下がれん あのアクマ達に

お前の心臓を奪われるワケにはいかないんだ

今はいいが最後には必ず心臓をもらう

巻き込んですまない」

「……………」

どうやら人形の心臓がイノセンスの様だ

トマが神田に粉々になったナニかを差し出す

「ティムキャンピーです」

するとティムは、トマの手の中で少しずつ元の姿に戻っていく

そして完全に自己修復すると、体の半分以上はあるであろう

巨大な口を開くと、レベル2の姿を映していく

これは、ティムの機能だ

神田はその映像を注意深く観察すると、あることに気づく

「鏡のようだ…」

「はい？」

神田は続ける

「逆さまなんだよこのアクマ…」

見てみる、奴がモヤシに化けた時の姿…服とか武器とか…

左右逆になってる」

トマはあることに疑問を持つ

「もやし？」

「あいつのことだ」

あいつとは、アレンのことだ

だが途中からレンが割り込んできたために

これ以上レベル2の情報を持っていない

コンコンコン

「おい、トマ」

「なんででしょうか？」

「今、何か聞こえたか？」

「どのような音ですか？」

「まるで、硬いものを叩いているような音だが

聞こえなかったのか？」

ドガァン！

「「！！！！？」」

神田とトマの隣の壁が砕け散った

「あー、やっと出れたー！

…エクソシストと、ファインダー？

ってことは、イノセンスも一緒かな？」

壁から出てきたのはレン、ずいぶん迷い続けていたようで

疲れ切った顔をしている

「さて、イノセンスを渡してもらおうか

エクソシストにファインダー？」

神田は険しい顔でれんに問う

「もやしはどうした？」

もやしが何なのかわからないのだろう

レンの目は点状態だ

「モヤシって誰？」

「お前が相手してた奴だ」

「ああ、アレン・ウォーカーのことか

あいつは今ごろ迷ってるんじゃない？

私は気絶させたただだし、」

「気絶させただと？」

「そうだよ、私はあんたらの敵だし

そうするのが普通でしょ？」

私はあんたらの敵、

レンのその言葉に神田は一瞬動揺したが、

神田には神田の任務がある、

私情を持ち込む訳にもいかないのだ

「おい、お前」

「何よ？」

「お前の名は、風斬レンで間違いないな？」

「確かにそうだけど、なんで私の名前を？」

神田はレンにとって信じられない事実を口にする

「それは、お前が3年前まで

——エクソシストだったからだ」

「！??？」

第6夜〜マテール5〜（後書き）

次回をご期待ください

アンケート！

この小説を読んでくれている

読者のみなさん！

これから、レンのイラストを掲載するか迷って

いるのですが掲載した方がいいでしょうか

掲載するなら皆さんにアンケートを取ろうと

思った次第です

次の質問にどうか、お答えください！

1、レンの容姿で想像したことは

なんですか？

（目の形や雰囲気など）

2、レンの衣装はどういった物がいいでしょうか

（着物、ブラウスなど）

3、クリスマスは、番外編を書くつもりですが

どういうものでもいいでしょうか

（ノアとのパーティ、エクソシストだった頃の

記憶など）

4、以後、挿絵をいれるべきでしょうか

以上の4つです、どうかお答えください！

アンケート！（後書き）

感想の所に、意見をお願いします！

第7夜　マテール6

「私が、エクソシストだって？」

「マジかよ！千年公！」

「エエ？そうデスヨ？レンは「元」エクソシストデス
そんなコトよりジャスデビ？」

クロス討伐のお仕事はドウシマシタ？」

「「おう、直球！」」

どうやら、仕事は失敗したようだ…

デビット（髪が黒い方）が、口を開く

「レンはそのことを知ってんのか？」

「知らないハズでス？教えてませんカラ？」

「そっいゃ、レンって記憶ねえんだよな…」

どーやって消したんだ千年公」

「彼女のノアの能力を使いまシタ？」

「レンの能力って何だよ」

「全てを無に帰すカデス？それをレンの脳に使って

記憶を消したのデス？」

「「！！」」

「レンの記憶って戻らないの？ヒッ！」

特徴的な喋り方、これはジャスデロだ

「戻りません？デスが、レンが能力の使い方を思い出せば

記憶を取り戻すかも知れませんネエ？」

デビットは隣にいるジャスデロに話しかける

「なあ、ジャスデロ」

「？デビット」

「ノアにはイノセンスは毒だよな？」

「うん、そーだよ ヒツ！」

珍しくデビットが考え込む

（おかしくねえか？イノセンスはオレらに毒だろ？

なのに、レンはイノセンスの適合者…

だめだ、意味わかんねえ！）

己が頭脳では理解不能だとわかったデビットは

千年公に聞いた方がいい、思い千年公に聞くことにした

「なあ、千年公」

「何でシヨウ？？」

「レンはノアだよな？」

「ハイ？まごうことナキノアデスヨ？」

「じゃあ、なんでレンがイノセンス

なんかの適合者なんだよ？」

「簡単なことデスヨ？、あの子は『14番目』と同じ

本来存在しないハズのノアだからデス？

イレギュラーにはナニがあるか、わからないでシヨウ?。」

そう、ノアは13名それ以上なんてありえないのだ

「ちなみに、あの子が方舟 ココ に来たノハ

ある『取引』ヲしたからナノデス?。」

「『取引』?。」

首をかしげ、顔を見合わせるジャスデビ

「エエ?『取引』デス?あの子がここに来る代わりに

ある人物を元に戻す、とイウ条件で

あの子は、教団とお友達を裏切ってまでココに来たのデスヨ?

わかりマシタ??二人共??。」

「ああ、大体...」

「ヒッ!ややこしいね!。」

「タダ...消去したとイッテモ、彼女の能力を

使いマシタカラネエ...?もしかしたらチョットした事で

あの子の記憶が戻ってシマウカもしれマセン?

せめて、マテールにエクソシストが居ないとイイのデスガ？」

s i d e レン

嘘だ…私はノアだ、エクソシストじゃない

でも、この人が嘘を言ってるようには見えない…

3年前…か、記憶にないのに確かめようがないじゃないか

ティキや千年公が、私に嘘つくわけないよね…？

わからない…あの時と同じだ、私がノアになったときと、同じ…

「おい、どうして何も言わない？」

「…私になにが言えるのさ…わかんないから言えないね

いや、わからないじゃなくて、知らない、かな？」

「何が言いたい」

「知らない、ことはどうにもならない

3年前まで、って言ったよね？

悪いけどその時期の記憶は、私にはないんだよ…」

知らないって怖いな…せめてそのときの記憶が私に

残ってたらよかったのに…

「記憶がないだと?」

なんか今にも襲ってきそうだね

でもね、知らないモノは知らない

「ないものはない、ってことさ」

「どういうことだ」

この人自覚してるの?さっきから同じ事聞いてるよ…

「あのさー自覚してるかもしんないけど

さっきから似たような事聞いてるよ?」

「知るか」

「オイオイ、そんなのアリかよ…」

ジャスデビだったらキレてんな

ハア…

「メンドクセエ…」

「それは私が言いたいんだけど…でさあイノセンスは？」

気づいたらいないよ…逃げられたなあ

「あいつら逃げやがった！！」

「気づくの遅くない？」

「ああ？」

なんつう殺気…怖いね

「テメエ気づいてたなら言えよ！」

「私の知ったことじゃないね！」

「お前…イノセンス追ってんじゃねエのかよ！」

「追ってるけどそれが何よ！あんたエクソシストでしょ！」

「カンケーねえ！」

「ざけんな！なんで私が！」

「闘んのかテメエ！」

「上等だ！かかってこいよ！」

「神田殿、落ち着いてください！」

「なんだよ、テメエ！」

……？なんだ？こんなこと前にも……？

ザザッ

頭に何か流れてくる……なんだ……！？これは記憶？！

『ユウ、レン、いつまで続けてんのさ！』

『なんだ、アルマか』

『なんだ、ってなんだよ！二人共！』

『どうせ怪我しても治るよ？』

『そういうことじゃない！』

『そうだぜ、アルマこんなの10秒もすりゃ治る』

なんだよ、こりゃあ、こんな記憶知らないぜ？

アルマ、ユウ、レン？

誰だ？あれは私か？じゃああの二人は？

あの、片割れの方には見覚えが無くもないような……？

誰かに似てんだよなー誰だっけ…？

あの目つきの悪さは、まさか、まさか！

目の前の長髪のエクソシストか！？

いやいや、ありえねエ！つか、私はアイツと同郷かよ！

「ククツ…アハハハッ！」

「！？」

「あー、なるほどねえ…」

結局、私はエクソシストだった、ってわけか

笑えてくるね…どうりでイノセンスの使い方が

わかるわけだ

？ファインダーの様子がおかしい？固まってる？

「神田殿後ろ…」

アレン・ウォーカー？へえ…考えたねレベル2

（偉いじゃん2？よく思いついたね）

（これで、ファインダーは消えます）

（でも、しばらくふりを続けるよ？）

（わかりました、レン様）

ゆらり、アレンもどきが近づいてくる

「さ、左右逆…っ」

へえ、あいつ神田って言うんだ

記憶じゃ、ユウだっけなっただあ 神田ユウか

神田のイノセンスの形状は日本刀？

おっかないね

神田はイノセンスをかまえた

「どうやら とんだ馬鹿のようだな」

馬鹿なのはあんたじゃないの？

ほら、よくみろよ

まあ見る気もないだろうけど

あのアレンがなんかおかしいとは、思わなかったのか？

短気っつーのは直した方がいいんじゃないの

ほら、どつこつ言ってる間にもアレンもどき

今にも泣きそうじゃん

バン！

なんだ！？

壁から手が生えてる！？いや違う！

あの手はアレン・ウォーカーのイノセンスだ！

あーあ、折角ファインダー消せそうだったのに

何してんの、アレン君？

今にも死にそうな、アレンもどきが

小さくアレンの名を呼ぶ

「ウォ…ウォーカー殿…」

…ハア

とんだお人好しだねアレン・ウォーカー

神田が殺気の籠った声でアレンを呼ぶ

「モヤシー！！」

「神田…」

「どういづつもりだテメエ…！」

なんでアクマを庇いやがった…！！」

アレンは一瞬怯んだが、臆することなく

言い返す、…茶番だね

「神田、僕にはアクマを見分けられる『目』があるんです

この人はアクマじゃない！」

「アタリだよ！アレン・ウォーカー！」

試しにそいつの皮膚取ってみろよ、正体がわかるぜ？」

ベリッ！

アレンはもどきの皮膚を取った

その正体は、ファインダーのトマだ

「トマ…！！？」

「何…っ」

「そっちのトマがアクマだ神田…！！」

どうやら、千年公が言ってた“アクマを見分ける目”

ホントだったんだな

そのとき、偽トマの表情が急変する

獲物を見つけた時のアクマの狂気の顔

そして――

ドン！

神田を壁の向こうまで殴り飛ばした

「ぐっ」

神田のイノセンスが弾かれ、床に突き刺さる

「ヒヤヒヤヒヤヒヤ」

「かつ…神田…！」

「悪いけど行かせないよ、アレン」

「うわっ…！」

私は、アレンに炎乱を突き付けた

「悪いけど、行かせないよアレン・ウォーカー…！」

「行かせてもらいます、何があっても！」

「そうかよ、じゃあここで消えろ！アレン

炎乱2陣目灼熱地獄！」

ゴオオオッ！

あたり一面が炎で満たされる

これで、終わりだよ

——！？

「うおおおっ！」

「嘘だろ……！なんでまだ生きてるんだよ！」

「破滅ノ爪！」
エッジ・エンド

「——！」

ギャギャッ ギャンッ！！

ギン！

！

何でいきなり強くなる？

「だから人間は嫌いだ」

「なんでですかッ！」

「お前に言う必要は無いよ」

つう、アレンの頬から血が垂れる

「ま、いいや

そろそろ向こうも終わるっぽいし、こっちも終わろうか

部下に先越されちゃ癪なんだな

コンバート
炎乱転換」

炎乱の形が変化する

槍から徐々に形を変え、剣となった

「なあ、アレン・ウォーカーお前何でそこまで足掻く？」

「…仲間が大事だからですよ…」

！！…仲間ねえ

何考えてんだよ私は、こんなのガラじゃねえな

「別に今じゃなくてもいいか…」

行きなよ…アレン・ウォーカー」

ドン！

「なんだ！？」

こりゃあ、血の臭い？まさか、もう終わったのか

早いな

「アレン早くしな！」

何してんのよ、私は！ついにおかしくなったね

とりあえずここはまずいな…崩落寸前じゃねえか

誰かさんはまだ行こうとしねえし、ああクソッ

しょうがない！

ガッ

「へ？」

グワッ

「おらよ！仲間とやらのとこに飛んでいきな！

お仲間死なせたいの？」

千年公に怒られるのは御免だが、すつきりしねえのは
もつと嫌だ！

あーあ、やつちゃった千年公に怒られるな
でもまあ、2だって弱かねえ、充分だろ

（おーい、2？聞してるー？）

（何でしょうか）

（私帰るから、イノセンス回収よろしくー）

よし、あとは千年公にどう説明しよう…

第7夜〜マテール6〜（後書き）

3000字突破！

第8夜　帰宅

「ただいまー」

はあ、疲れたと呟きながらレンはいつも通りに帰ってくる

「なあ、ロード千年公居る？」

「いるよぉーおーい千年公レンが帰ってきたよぉー」

すると何故かエプロンを着た千年公を見つけた

「ヤット帰ってきましタネ？お仕事はどうデシタ？？」

「スンマセン…失敗しました」

「珍しいねえーレン、なんかあったのぉー？」

レンが任務を失敗するのは珍しいらしく、千年公もロードも驚いている

「…ちよつとね」

そう答えるレンは心なしかげっそりしているようだった

「レン、大丈夫うー？」

「うん、平気平気」

そういつて、ロードにレンは笑いかけた

だが、いつものレンの笑顔とは違いどこか悲しげだった

「ホントに大丈夫デスカ??」

「ホントに大丈夫だよ…」

言っている本人が気づいているかはわからないが

レンの足どりはふらふらとして正直なところ、説得力はゼロに等しい

「やば、忘れてた」

そうつぶやいてレンは鞆を漁り始めた

そして、鞆の中に入っていた袋を出した

「ロード、ハイお土産ー」

レンはロードに袋を渡した

その袋の中には、飴やチョコレートなどロードが好きそうなモノが沢山入っていた

「わお、サンキューレン♪ おいしそぉ」

嬉しそうにロードは受け取った

そして、早速中に入っていたお菓子を食べている

「ハイ、千年公の分」

レンが千年公に渡したのは千年公に良く似合うであろうシルクハットだ

それは、少しメルヘンチックで店長によると

「これはきつと似合うお客さんいないよー」

とのことだ

だが、それでも似合ってしまうのが我らが千年公

……………想像以上に似合っていた

そして、千年公は気に入ったのか踊り始めた

レンは鞆を漁っているときにあることに気づく

「…………土産の数が足りない」

確かに彼女の目の前にある土産の数は、千年公とロードの分を抜いても

9個しかないのだ、レンはどの土産が誰にあげるものかを確認する
まず、同じモノが入った袋が二つ、これはジャスデビの二人

次に、甘ったるそうな物が大量に入っている袋、これはスキン

今の時点で3人の土産はどれだかわかった

だが、残りの6個は？

ティキ、ルル＝ベル、シェリル、マーシーマ、フィードラ、トラ
イド、マイトラ

この7名の内たった一人だけ土産が無い人物がいるのだ

ルルの土産は、なんとなくで買ってきた紅茶セット

マーシーマは、ダンベル

トライドとマイトラは適当に詰め合わせたモノ

シェリルは、写真キット
デジカメのようなもの

フィードラは髪留め

6名の土産が判明した、そしてレンが土産を買い忘れていたのは

ティキだった

「うわー、どうしょ

「どうしまシタ??」

「ティキの土産買ってない…」

「きゃははははは！」

大笑いするロード、だがレンと千年公は苦笑いだ

「どーしよ、千年公」

「ナゼ、我輩に振るのデスカ??」

「…何となく…?」

ロードはまだ笑っている、レンはもしかしたら鞆にはいつてるかも!という

小さすぎる望みを胸にまた鞆を漁りだす

レンは武器が大量に入った鞆を逆さにして鞆の中身を漁る

一人じゃ面倒だと思ったレンはようやく笑い終えたロードを呼ぶ

「おい、ロード」ちよつと手伝って」

「いいよ」何すればいいの?」

「ティキのお土産さがし」

数分後……

「無いねえ」

「やっぱり買ってなかったかな」

「あのオーレン、ロード？」

「「何ー千年公お」」

「ハンバーグづくり手伝ってくれマスか？」

「ねえ千年公もしかして今日の夕食ハンバーグ？」

「エエ？そうデスヨ？」

「もう、一週間はハンバーグ続い…ムガッ」

ロードがレンの口を押さえた

「それ言っちゃダメエ」

不思議そうに千年公が聞く

「どうかシマシタか？」

「ふぁんれもねいれふ（なんでもないです）

フォーロふあなして（ロード放して）」

「いいよお」

ロードはレンから手を離した

「はあ……」

「そういえばレン」

「何？ロード」

「前から思ってたんだけど、レンっていつもそのペンダントつけてるよねえ」

「……！ああ、コレ？」

そう言って、レンは首にかけているペンダントを見せる

これは、レンが記憶を失う前に神田から受け取ったものだ

……— 本人はそれを知らないが

「うん、それだよいつつも着けてるからなんでかなあ」って

「うーん、なんとなく？なんか着けておいた方がいい気がするさ」

ガサゴソ

「レン、何してんのぉ？」

「鞆漁ってる」

「ティッキーのほないんでしょあ」

「うん、もう諦めたよーちょっと探し物」

「ボクも手伝うよぉ」

「ありがとう」

その微笑ましい光景を千年公は見守っていた

（やっぱりハンバーグは我輩が作るとシマシヨウ？）

そして、その日の夕食で、約^レ一名が倒れたとかなんとか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1570z/>

THE LAST MEMORY ~ 第0使徒風斬レン ~

2011年12月19日16時50分発行